



金次郎との不思議な「縁」…93歳の二宮尊徳の語りべ

「一宮尊徳研究家として精力的に活動する安西さんを紹介します。真岡市で生まれた安西さんは学生の時、東京大空襲に遭遇しました。結婚を機に旧今市市へ。子育てが終わると執筆活動を始め、2001年(平成13年)に発行した「瑠璃子の旅」が栃木県芸術祭で文芸賞を受賞しました。

研究をはじめたきっかけは？

二宮尊徳(金次郎)が下野国桜町陣屋(旧二宮町)や真岡・東郷陣屋(真岡市)で復興事業をしていた19世紀中ごろ、私の実家は真岡で木綿問屋をしていました。米や木綿の取引で、金次郎とも深い交流があったそうです。そして、金次郎が東郷陣屋から今市報徳役所に移ったこと、私が今市へ嫁いだことに「縁」を感じ、金次郎に興味を持ちました。

どんな活動をしていますか？

「いまいち一円会」や「今市報徳社」に所属して、金次郎などについて学んでいます。中国と日本の学者などで組織する「国際二宮尊徳思想学会」の会員

にも誘われ、2年前には中国で開催された大会に出席しました。また、依頼があれば講演なども行っています。

最近行った講演は？

昨年5月に栃木県女性教育推進連絡会の研修会で、「金次郎を巡る女性たち」と題した講演や、6月に金次郎を讃える合唱組曲で朗読をしました(下の写真)。今年1月には大沢小学校で、東京大空襲を体験した話をしました。平和の大切さについて、子どもたちが真剣なまなざしで話を聞いてくれたことが、とてもうれしかったです。

研究の中で思うことは？

金次郎の娘の文や息子嫁の鏡は、金次郎を尊敬し、仕法に共感して仕事を手伝い、重要な役割を果たしました。2人は主義・主張ではなく、至誠(※)を貫くことで女性差別を見事に乗り越えました。現代は男女共同参画が浸透してきていますが、男性・女性と生物学的に違うそれぞれの特性をお互いに尊重し、特性を生かして社会に貢献することが大切だと思います。

今後の活動は？

今は足尾銅山(金次郎の門人・



組曲「二宮尊徳～自他祝福に生きる」で朗読

インタビューを終えて

とてもはつらつとした安西さん

健康の秘訣を尋ねると「気の向くまま。特に何もしていないわ」と笑います。興味のある講演会や展覧会などの催し物があると、積極的に出掛けると言います。この好奇心旺盛な精神と何事も楽しく捉える姿勢が、安西さんの元気の源だと思いました。

安西さんのお話は、豊富な知識とユーモアに溢れ、肝心なインタビューを忘れてしまうほど楽しい時間でした。

※至誠…二宮尊徳の思想や仕法の考え方の中心となるもので、真心・誠意を意味する